
エンジェルボイス

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンジェルボイス

【Nコード】

N9101S

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

放送部の中田理恵の声を聞いていつも取り乱す徹。その彼が取っついていく行動とは。学園ラブコメものです。声には魔力があります。

第一章

エンジェルボイス

とにかくだ。極めつけの美声であった。

放送室から聞こえるその声はだ。誰が聞いてもだった。

「可愛い声だよなあ」

「ああ、アニメのキャラみたいだな」

「綺麗だし可愛い」

「澄んだ声だよ」

「本当にな」

皆その声を聞いてこう話す。

「放送部の娘だよな」

「ああ、一年のな」

「名前は確か」

「中田っていったか？」

その名前についても話される。

「中田理恵っていったか」

「中田理恵っていうのか」

「そういう名前なんだ」

その名前がだ。皆に知られるのだった。

「それで放送部の一年か」

「成程な」

「とにかく声が綺麗な娘だよな」

「本当にな」

皆の間にだ。その理恵の名前が知られるようになった。そしてその中にはだ。

同じ一年のだ。彼もいた。

柳田徹という。彼は野球部だ。

しかも黄金の左腕とまで呼ばれている。一年でいきなりエースに

拔擢されている。

荒々しい鬘の如き黒髪と燃える様に熱い目、それと精悍な顔をしている。背は普通位だがそれでもだ。運動能力と体力からピッチャーになっているのだ。

その彼がだ。理恵の名前を聞いて言うのだった。

「そうか、中田理恵っていうんだな」

「って何だよ」

「いきなり部室で叫ぶなよ」

「叫ぶのはグラウンドにしとけよ」

部活をはじめる前の部室においてだ。彼は着替え中の部員達に言われた。ロッカーの他は古いクラスにある様な机や椅子がある。コンクリートの壁には目指せ甲子園といった言葉が書かれている。

そうしたありきたりの部室の中でだ。彼はまだ着替え中でトランクスやら上半身裸やらの仲間達に突っ込みを入れられたのである。

「御前もさっさと着替えろよ」

「その猛虎のトランクスからな」

「気が得て部活に出るぞ」

「早くな」

「いや、だからあの放送の娘だよ」

その彼等にだ。まだ言う彼だった。

「そうか。中田理恵さんっていうんだな」

「何ていうかな。独特な声だよな」

「高くて細い感じもするしな」

「小さな女の子みたいだな」

「そんな感じのな」

「ああ、本当にいい声だ」

また言う彼だった。

「わかった。それならな」

「それならってな」

「一体何するんだよ」

「それで」

「またあの声を聞きたいな」

何故かだ。徹はここでこんなことを言った。

「是非な」

「そんなのまた聞けるだろ」

「なあ。放送部なんだからな」

「今だってな」

「聞けるだろ」

「放課後を知らせる放送でな」

その放送がだ。もう少しでかかるというのだ。

「なら聞けばいいだろ」

「またすぐにな」

「聞けるだろ」

「ああ、そうだな」

徹は部員達の言葉に頷いてだ。そしてだ。

その放送がかかった。するとだ。

彼はそれでだ。態度を一変させたのだ。

その黒と黄色の横縞のトランクス一枚でだ。急に身悶えしだしたのだ。

「な、何だよ」

「ヤクやってんのかよ」

「犯罪だぞ、それ」

「絶対にそれは止めろよ」

皆一瞬それかと思った。しかしだった。

第二章

彼はだ。さらにであった。

「よし、やるぞ！」

いきり立った叫びであった。

「今からな。部活頑張るぞ！」

「っておい」

「声聞いたらテンションあがったな」

「百パーセントが百五十パーセントになったぞ」

つまり一・五倍になったのだ。

「まさかと思うけれどな」

「こいつ、彼女にな」

「惚れたか？」

「まさかな」

皆こう考えた。そしてだ。

その証拠にだ。彼はだ。

理恵のその声を聞くと何時でもだった。急にテンションが上がり元気になる。まるでドーピングをしたようにだ。そうなるのだった。そんな彼を見てだ。周囲は呆れ果てた。そしてこう言うのだった。

「そんなにあれならな」

「そうだよな、本人に会えばいいのにな」

「同じ一年だし」

「しかもクラスもわかってるしな」

実は徹のクラスと理恵のクラスは隣同士だったりする。

「けれどあいつまだクラスまでは知らないみたいだぞ」

「じゃあ教えてやるか」

「ああ、そうしてやるか」

皆ここでは親切心を出した。それで、であった。

彼にだ。理恵のことを話すのだった。

「えっ、隣のクラスの娘か」

「ああ、そこにいるからな」

「まあ気が向いたら会いに行ったらどうだ？」

「そうしたらどうだよ」

皆彼にこう勧めるのだった。

「あの娘の声、気に入ってるんだよな」

「だったらな。行けよ」

「それから御前次第だけどな」

「わかった」

また熱い声で頷く。

「それじゃあな」

「っていうか知らなかったのかよ」

「声にもう夢中ってか」

「それで素顔に会ったらどうなるか」

「こりゃまずいか？」

皆彼がまさに夢見る状態なのを察して述べた。

「幻滅するってあるからな」

「素顔を見てな」

「そうになったらどうなるか」

「まずいぞ、これ」

「若し落ち込んで野球にその影響が出たら」

彼はエースなのだ。それも超高校級の。

「うちの部活負けるな」

「甲子園も夢じゃなかったのにな」

「それがあいつが駄目になったら」

「どうするんだよ」

その心配も浮上する程の状況になろうとしていた。しかしであった。

彼はその隣のクラスに行き理恵と会った。そうしてこう言うのであった。

「いやあ、声もいいけれど」

「本人もか」

「本人さんも気に入ったんだな」

「可愛いよな」

実際にこう言うのだった。

「小柄で楚々としててさ」

「まあ確かにな」

「外見も悪くないな」

「可愛いよな」

「そうだよな」

周りもそのことを認める。理恵は確かに小柄であり華奢な身体つきをしている。色白でやや面長の顔をしていて眉は多少薄い。アーモンド型の目は少しだけつり上がり気味になっている。その目は奥二重だ。黒い髪を伸ばしたうえで後ろで上にあげてまとめカールも作っている。そうした外見である。制服がよく似合う。

第三章

徹はだ。彼女のその外見にも惚れたというのであった。そしてこんなことを言った。

「それですぐにな」

「すぐに？」

「すぐにとって何だよ」

「何したんだよ」

「告白したよ」

単刀直入であった。一直線である。

「そうしたらな」

「そうしたらって」

「もうか」

「もう言ったのかよ」

「そこまでいったのかよ」

「そうなんだよ。それでな」

さらにだ。彼はさらに話す。

「オッケーしてくれたよ」

「おいおい、いってのか」

「了承してくれたのかよ」

「凄い展開だな」

「それでよしってなるなんてな」

「何でも彼女もフリーらしくてな」

徹にとっては幸運なことだ。そうだったというのだ。

「俺のその告白受けてくれたよ」

「まあ。悪い奴じゃないしな」

「だからか」

「それでよし、か」

「運のいい奴だ」

「全くだよ」

皆呆れながらもその彼を祝福した。そうしてだった。

徹は理恵と交際することになった。勿論理恵は放送部を続けている。彼女のその声を聞いてだ。彼は常に奮い立った。

それでだ。そのピッチングやプレイ全体がだ。

「おいおい、凄いな」

「何か能力あがってきてるな」

「ボールが走ってるな」

「球威も凄くなったよ」

「一段とよくなったな」

奮い立った結果だ。そうになっているのだ。

「全部あの娘のお陰か」

「あの娘の声を聞いて交際してな」

「よくなったな」

「全くだよ」

徹にとってもだ。野球部にとっても最高の展開だった。彼は部活以外の時も常に理恵と共にいてだ。その声を聞くのだった。

そして常ににこにことしている。そんな中でだ。

野球部といえば甲子園である。その甲子園を目指し誰もが戦っている。それは彼の高校の野球部も同じでだ。徹はそ中で投げた。

まさに力投だった。試合には順調に勝ち進みだ。遂に甲子園出場がかかっている試合にまで進んだ。県大会の決勝である。

「これに勝ったらな」

「ああ、甲子園だな」

「遂にな」

「出られるぞ」

「この試合に勝てば」

こう話してだ。彼等はだ。

その決勝戦に向かおうとする。だが、だった。

徹に異変が起こった。彼は暗い顔になっていた。それを見て野球部の仲間達は啞然となった。明らかに彼のコンディションは最悪だった。

「な、何だ!？」

「御前どうしたんだよ!」

「風邪か!？」

「馬鹿は風邪引かないだろ!」

「いや、風邪じゃない」

沈みきった声でだ。こう答える彼だった。

「ただな」

「ただ?」

「ただっていうと何だ?」

「何があっただよ、本当に」

「まさか理恵ちゃんと喧嘩したか?」

「喧嘩はしてない」

それは否定する彼だった。だがその声は沈んだままだ。

第四章

「ただ。あいつが風邪ひいてな」

「ああ、そういえば今日来てないな」

「そうだよな」

「それでなんだよ」

落ち込みきった声でまた言う徹だった。

「どうすればいいんだよ、本当に」

「まあなあ」

「何ていうかな、ここは」

「落ち込むな」

「とりあえずな」

「無理だよ」

本当に沈みきった声での言葉だった。

「どうしろっていうんだよ」

「声だけでも聞ければいいんだけれどな」

一人がこんなことをここで言った。

「それだけでも違うけれどな」

「ああ、そうだな」

「声な」

「声さえ聞ければな」

「全然違うな」

「そうだな」

こう話す。全員でだ。

「じゃあよ、御前携帯に声録音してるか？」

「あの娘の声な」

「どうしてるんだよ、そこは」

「まあ一応はな」

そうしているというのであった。この辺り流石である。

「録音してるからな」

「よし、それじゃあな」

「その録音聞きながらだよ」

「頑張れ」

「ああ、わかった」

とりあえずだ。実際に自分の携帯を取り出してだ。それで彼女の声を聞いた。

「本当に録音してるからなあ」

「何ていうかな」

「それ着メロにしてるだろ」

「ああ、してる」

実際にそうだというのである。

「声を聞くだけで幸せになれるからな」

「だからか」

「予想はしてたけれどな」

「それでも何かな」

「徹底してるな」

そこにだ。誰もが中毒患者を見ていた。

その中毒患者は声を何度も聴く。するとだ。

顔色が少し戻った。それでこんなことを言うのであった。

「よし、それじゃあな」

「元気出たか」

「そうなんだな」

「ああ、出た」

実際にそうだというのである。確かに顔色が幾分か戻っている。そしてその顔でだ。また言う彼であった。

「試合な」

「そうだよ、それだよ」

「もうすぐだぜ」

「頼むぜ、エースなんだからな」

「ここまできたら勝ちたいからな」
皆だ。この考えは一致していた。

「コンディションしっかりとな」

「メンタルからだからな」

「だからしっかりしてくれよ」

「そこは」

「ああ、絶対に勝つからな」

徹にしてもだ。それはよくわかっていた。彼がそのエースだからだ。

それでだ。彼はまた言うのだった。

「この声を聞いてな」

「しっかりしてくれよ」

「次勝てば甲子園だからな」

「それだから余計にな」

「頼んだぞ」

周りも真剣である。何しろ甲子園がかかっているからだ。

第五章

それで彼等も真剣だ。徹のコンディション維持に必死だ。そしてそのことはだ。風邪で倒れてしまっている当の理恵にも伝わっていた。

「そうなの。徹君が」

「ええ、そうなのよ」

彼女の友人が電話で知らしていた。ベッドで半身を起こしてだ。そのうえで話をしていた。ベッドはピンク色だ。実に女の子らしいベッドだ。

部屋もだ。ピンクが多く女の子らしい。その部屋にいてだ。話をするのだった。

「次に勝てばね」

「甲子園ね」

「そう、甲子園よ」

まさにそこだというのだ。

「夢の甲子園に行けるのよ」

「そうよね。勝てばね」

「けれどあんた今学校来れないじゃない」

風邪で倒れているからだ。それは言うまでもないことだった。

「だから彼。ちょっとメンタルがやばいのよ」

「落ち込んでるの？」

「具体的に言えばそうよ」

まさにそれでだというのだ。

「そうなのよ」

「そうなの」

「あんたの声を携帯に録音してるから」

このこともだ。理恵に話す友人だった。電話でのやり取りは真剣なものだ。彼女達にしてもだ。話すことは真剣なものになっている

のだ。

「それ聞いて何とかやってるけれどね」

「それでもなの」

「そうなの。正直甲子園は微妙ね」

友人はこう話した。

「どうなるかわからないわ。だからね」

「だから？」

「あんたしなくちゃいけないことがあるわよ」

友人が理恵に言うことはそのことだった。

「風邪でも。喉は大丈夫よね」

「ええ、それはね」

「それならまずは安心ね。じゃあいいわね」

「いいって？」

「今から言うこと。しっかりとやってね」

こう前置きしてからだ。理恵に話す。試合の日は迫っていた。

そしてその試合がはじまった。徹はだ。

ベンチでも携帯を手に使っていた。そうしてだ。

携帯からの理恵の声を聞いてだ。何とか気持ちを維持していた。

「俺はやるからな」

「ああ、本当に頼むな」

「俺達が打つからな」

「そして守るからな」

流石に彼一人で勝てるものではない。野球は九人でやるものだ。

あの怪物と言われた江川卓もだ。一人で野球をしていた訳ではないのだ。

「後ろは任せろ」

「安心して投げろ、いいな」

「ああ、やるさ」

彼も頷く。だが理恵がいないことはだ。彼に影響していたことは間違いなかった。

彼はこの試合本調子ではなかった。時折打たれる。ナインはその彼を助けよく守りそして打った。彼は二点取られたがチームは三点取った。

三対二だった。点数自体は彼等が優勢だ。しかしだ。

徹はやはり本調子ではない。どうしてもだ。やはり打たれる。点
は入らずともだ。試合はそのまま終盤に入った。

そして九回になった。この回を抑えれば甲子園だ。しかしだ。

彼はここで崩れた。ワンアウトを取ったまではよかった。

だがそれからヒットを打たれた。そして四球を続けて出した。一
死満塁、絶対絶命の状況になってしまったのだ。

「まずいな、こりゃ」

「今のあいつの調子だとな」

ベンチだけでなくだ。観客席も今の状況に暗い顔になる。

「押し出して同点か？」

「ヒット一本でサヨナラもあるぞ」

「どっちにしろここで打たれたらな」

「甲子園なくなるな」

「そうだよな」

その危惧がだ。彼等を覆っていていた。

そしてだ。マウンドにだ。

ナインが集まる。そのうえで徹に対して言うのだった。

「落ち着いていけ」

「いいな」

「あとたった二人だ」

「二人だけだからな」

こう言ってだ。彼を励ますのだった。だが雰囲気はだ。

第六章

明らかに敵の方に向いていた。彼等の方がだ。勢い付いていた。その中での励ましなぞ何にもならない。明らかにだ。彼等は敗れようとしていた。

徹もだ。それはわかっていた。それで何とか言葉を出すのだった。「とにかくだ。今はな」

「ああ、投げろ」

「後は俺達が何とかする」

「絶対取るからな」

打たれることが前提になっていた。彼も流石に気持ち折れようとしていた。ピッチャーが打たれることを前提にしていたはだ。

そんな状況だった。敗色は濃厚だった。彼等の高校のベンチも応援席も沈黙している。重々しい空気になってしまっていた。

だがそれはだ。突如として終わったのだった。

観客席からだ。声が聞こえてきた。

「徹君、頑張ってね！」

「！？この声は」

「まさか」

「あの声は」

誰もがその声に反応を見せた。するとだ。

そこにいた。理恵がだ。何とそこに理恵がいたのだ。

「理恵ちゃん、大丈夫か？」

「風邪ひいてたんじゃないのか」

「回復したのか？」

「まさか」

誰もが風邪で倒れていた彼女が今ここにいることに驚きを隠せなかった。しかしだ。

その声を聞いてだ。徹が変わった。

彼女の姿も見てだ。その表情を見る見るうちに変えた。

明るくなった。そして奮い立ったものになった。それだった。理恵に顔を向けてだ。こう叫んだ。

「ああ、俺はやるからな！」

「投げてね、全力で！」

「投げるよ、そして」

「甲子園、行ってね！」

「やってやるからな！」

こうしてだった。彼のメンタルは一気によくなった。コンディションもだ。

そのうえでだ。試合に向かう。最早彼には敵はなかった。

瞬く間に一人三振に取った。そしてだ。

最後の一人もだ。見事にだ。

このバッターも三振に取ってしまった。これで決まりだった。

試合に勝った。甲子園に行くことを決めた。その左腕でだ。

彼は理恵の登場によりそれをもぎ取った。そうしてからだ。

試合終了後すぐに理恵のところに駆けてだ。観客席にいる彼女にこう告げた。

「俺やったよ！」

「うん、おめでとう！」

「理恵ちゃんがいれくれたから」

それでだというのだ。

「やれたよ、こうしてね！」

そのことをだ。彼女に伝えたのだった。二人の交際はこれを期にさらに深いものになった。

そしてだ。その話の後でだ。周りは話すのだった。

「しかし。あの日よくな」

「ああ、試合に来られたよな」

「かなり酷い風邪だったのにな」

「よく回復できたな」

「本当にな」

「気合入れて回復させたのよ」

理恵に電話したその友人の言葉だ。

第七章

「そうしたのよ」

「気合入れてって」

「そうしてか」

「試合に間に合わせた」

「そうだったのか」

「そうよ。もう究極のやり方でね」

「それでだというのだ。」

「葱と人参と大蒜と生姜とキャベツと鶏肉と卵を入れてじっくりと
たいた雑炊に風邪薬、それをたっぷりと食べさせてね」

「まずは基本であった。」

「それと。お酒を飲ませて」

「ここは小声で話す。流石に高校生でおおっぴらには話せない。」

「汗をたっぷりかかせてね」

「で、なおした」

「基本だけれどそれをハードにしてか」

「それで風邪を治させたんだな」

「そうしてか」

「そうよ。間に合って何よりだったわ」

「彼女は満面の笑顔で話す。」

「いやあ、本当に何よりよ」

「ああ。御前がそれを理恵ちゃんにやってくれてな」

「それで風邪が一気に治ってな」

「球場であいつを応援してくれたから」

「甲子園決まったよ」

「まさにだ。それによってであった。徹が奮起してだ。甲子園を勝ち取ったのだ。そのことは誰が見ても明らかなことであった。」

「いやあ、本当によかった」

「全くな」

「それにな。あの二人あれからな」

「余計に仲良くなったしな」

しかもなのであった。二人の仲もなのだった。

「あの娘の声いつも聞いているな」

「とうかあの声を聞いて」

「それで幸せなんだな」

「それは彼だけじゃないわよ」

ところがだ。その女の子はだ。ここでこんなことを言うのであった。

「理恵だってそうだから」

「あれっ、ていうと」

「あの娘もか？」

「理恵ちゃんもか」

「そうだったんだな」

「そうよ。実を言えばね」

ここだ。衝撃の事実がわかるのだった。理恵と彼女だけが知っているだ。その衝撃の事実が今ここで話されるのであった。

「あの娘も。徹君の声がね」

「好きだったんだな」

「そうだったんだな」

「それでだったんだ」

「そうなのよ。彼の声が好きだったのよ」

それでだというのだ。

「それで告白も受けたしね」

「交際もしてるんだな」

「あの娘もか」

「あいつの声、好きだったんだな」

「成程なあ」

「好きなのは一方だけとは限らないのよ」

この事実もだ。話されるのだった。

「もう一方もってこともあるのよ」

「声についてもそうなんだな」

「そうだったんだな」

皆このこともわかったのだった。そしてだ。今も二人仲良く話している徹と理恵も見える。見れば徹だけでなく理恵もであった。彼の声を聞いてだ。にこやかに笑っているのだった。そんな二人であった。

エンジェルボイス 完

2011・2・24

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9101s/>

エンジェルボイス

2011年5月1日22時55分発行